大学生を対象とした新型うつ病のイメージ調査(1)

ケースビネットを用いた従来型うつ病（メランコリー型うつ病）との比較

○村中昌紀¹・山川 樹¹・坂本真土²

(¹ 日本大学大学院文学研究科・² 日本大学文理学部)

キーワード：新型うつ病, うつ病, ケースビネット

Examination of the image to “Modern type depression” in the undergraduate

Masaki MURANAKA¹, Itsuki YAMAKAWA¹ and Shinji SAKAMOTO²

(¹Graduate School of Literature and Social Science, Nihon Univ., ²College of Humanities and Sciences, Nihon Univ.)

Key Words: Modern type depression, depression, case vignette

目 的

本研究では、いわゆる新型うつ病および従来型うつ病（メランコリー型うつ病）と考えられる事例に対して抱かれるイメージについて調査を行う。

「新型うつ」とは、近年問題とされることが多くなった、従来型のうつ病・抑うつとは異なる特徴をもつ複数の抑うつ症候群に付された総称である（坂本・村中・山川, 2014）。勝谷・岡・坂本(2013, 2014)は、大学生や会社員など非専門家を対象とした、「新型うつの人(びと)」、「新型うつの原因・理由」に対するしろうと理論について調査を行っている。しかし、これらの調査では「新型うつ」という言葉についての認識について検討しており、各事例に対して抱かれるイメージは検討していない。そこで、本研究では新型うつ病および従来型うつ病を想定して作成された事例を提示し、それらの事例に対して大学生が持つイメージを比較し検討することを目的とする。

方 法

大学生 198 名(男性 72 名, 女性 126 名)を対象に、大学の講義の時間を利用して調査を実施した。提示する事例は、精神科医の監修のもと新型うつ病および従来型うつ病を想定し作成した(順序効果をなくすため、約半数の対象者には事例の提示順序を逆にした)。調査対象者に対して各事例の患者について、機能障害の程度、重症度、治療の可能性、発症の原因帰属(内的：脳・性格・人間関係・努力不足、外的：生育環境・社会情勢・職場環境)、自傷他害の可能性(自傷の可能性・他害の可能性)、患者への対応(関わり合いの回避・支援の意志)の各項目について、「そう思わない(1点)」から「そう思う(5点)」までの5段階評定で回答を求めた。

結 果

まず、機能障害の程度、および重症度について新型うつ病、従来型うつ病の2つの事例間で対応のある *t* 検定を行った。その結果、機能障害の程度については、新型うつ病の事例では、従来型うつ病の事例と比べ有意に高いと評定されていた($t = 5.35, p < .01$)。また、重症度については、新型うつ病の事例では、従来型うつ病の事例と比較して重症度は有意に低く評定されていた($t = 14.41, p < .01$)。

各事例について機能障害の程度と、重症度について有意差がみられた。これらの変数はイメージの評定に影響を与えると考えられるため、これらの変数を共変量とし、事例(新型・従来型)を独立変数とする共分散分析を行った(Table 1)。その結果、内的原因帰属のうち人間関係に原因($F = 94.26, p < .01$)および努力不足に原因($F = 84.69, p < .01$)、外的原因帰属のうち生育環境に原因($F = 4.19, p < .05$)、自傷他害の可能性のうち他害の可能性($F = 40.69, p < .01$)、患者への対応のうち関わり合いの回避($F = 123.96, p < .01$)について、従来型うつ病の事例と比べ「新型うつ病」の事例において有意に高く評定されていた。

一方で、患者の治療可能性($F = 11.08, p < .01$)、内的原因帰属のうち性格に原因($F = 7.60, p < .01$)、自傷他害の可能性のうち自傷の可能性($F = 48.38, p < .01$)、患者への対応のうち支援の意志($F = 29.26, p < .01$)について、新型うつ病の事例に比べ、従来型うつ病の事例において有意に高く評定されていた。

なお、原因帰属のうち、脳に原因($F = 0.08, n.s.$)、社会情勢に原因($F = 0.85, n.s.$)、職場環境に原因($F = 0.16, n.s.$)

Table 1 重症度、機能障害を統制した最小2乗平均値と共分散分析の結果($n=198$)

変数名	最小2乗平均値		共分散分析の結果	
	従来型	新型	<i>F</i> 値	
治療可能性	3.40	3.16	11.08	** 従来型>新型
脳	2.19	2.00	0.08	<i>n.s.</i>
性格	4.18	3.86	7.60	** 従来型>新型
人間関係	2.45	3.88	94.26	** 新型>従来型
努力不足	1.97	3.03	84.69	** 新型>従来型
生育環境	2.71	2.95	4.19	* 新型>従来型
社会情勢	2.59	2.48	0.85	<i>n.s.</i>
職場環境	2.88	2.84	0.16	<i>n.s.</i>
自傷の可能性	3.84	2.67	48.38	** 従来型>新型
他害の可能性	1.85	2.72	40.69	** 新型>従来型
関わり合いの回避	2.60	3.66	123.96	** 新型>従来型
支援の意志	2.59	2.48	29.26	** 従来型>新型

* $p < .05$, ** $p < .01$

考 察

新型うつ病および従来型うつ病と考えられるそれぞれの事例に対してのイメージについて調査した結果、両者には機能障害の程度や重症度だけでなく、これらを統計的に統制した後のいくつかのイメージ変数についても有意差が見られた。イメージ変数の結果を見ると、新型うつ病の方が全般的にネガティブに判断されていると考えられる。特に、新型うつ病と考えられる事例に対して、関わり合いの回避の評定値が高いこと(1-5の評定で3.66)から、新型うつ病と考えられる患者は周囲から孤立しやすく、適切な援助がおこなわれない可能性が考えられる。

また、自傷他害の可能性については、新型うつ病と考えられる事例では、自傷の可能性が低いと評価されていた(1-5の評定で2.67)。しかし、樽味(2005)は、新型うつ病に含まれると考えられるディスチミア親和型うつ病においても、患者は衝動的な自傷や自殺企図を行うことがあると指摘している。すなわち、新型うつ病では自傷の可能性があっても、周囲から見逃される可能性があると考えられる。

本研究では大学生を調査対象としたが、今後は「新型うつ病」が問題視される社会人においても同様のケースビネットを用いた調査が必要であると考えられる。